

## 2010 年度自己点検・評価報告書

### 〔文学部〕

#### 1. 教育内容・方法

##### (2) 教育方法等

#### 助言項目：

F D活動については、教員の参加が基本的に教員個人の意思に委ねられている点を問題として自覚していながら、大学としての対策がないので、教授法などについて全体での問題意識を共有し積極的に取り組むよう改善が必要である。

#### (評価当時の状況)

年1回のF D講演会への参加が呼びかけられる程度で、学部としてF D活動の組織的な取り組みは見られなかった。

#### (評価後の改善状況)

全学的に年3回のF D活動への参加が義務化されたが、文学部としても平成20年度より授業見学会を開催し、その参加報告を教授会で行ってきた。22年度からは全教員が一度は自分の担当科目で授業見学会を開催するとともに、他の教員の見学会へも1回は参加することを義務として行っている(資料参照)。授業を公開し、また他の教員の授業を見学することで、授業改善の大きな契機となっている。

また22年度は学部独自のF D活動として、外部講師を呼んで「卒業論文指導について」講演会と事例報告会を開催した。この研修を通じて、必修科目である「卒業論文」の指導方法について共通理解を深めることができた。

#### (参考資料)

授業見学会日程一覧

### 3. 研究環境

#### 助言項目：

多くの学部・研究科においては、教員の標準授業負担のバランスが取られておらず、また、提出された資料によると研究活動が不活発な教員が見受けられるので改善が望まれる。

#### (評価当時の状況)

評価を受けた当時は、通年のコマ数でいうと、10コマ担当するグループと14コマ担当するグループの二つに負担の分布のピークが見られた。14コマ担当のグループは、英語・中国語・ロシア語など語学系を担当する教員であった。

#### (評価後の改善状況)

授業負担の点では、平成22年には極端な二極化状態を解消し、11コマを中心とするなだらかなコマ数負担の状況になった。7コマ以下の教員は、在外研究者、助教など特殊な事情によるものである。20年度に12コマを超過して担当している21名は、全て語学の教員であり、少人数教育を標榜しているため、および旧・新カリキュラムが重なっているためである。

研究活動を促すために、平成22年度から、個人研究費の傾斜配分を実施した。その実効性をこれから検証していく段階である。

#### (参考資料)

専任教員の授業担当コマ数経年推移とその分析表  
専任教員コマ数（文学部）